



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第16号(R4. 6. 28)

今年も授業研修がはじまりました ~新たにグループ制の導入~

今年も河東中学校では、先生たちの授業研修を始めました。この授業研修の目的は、先生たちの授業力を高めることにより、生徒のみなさんの学力の向上を図るものです。そのため、先生たちは一人年間 2 回の公開授業を行い、授業後は研究協議会を開いて研修します。

中学生のみなさんが、一日の生活の中で最も多くの時間を過ごすのは、睡眠時間を除けば授業時間が最も多い時間です。その時間が楽しければ一日が楽しいでしょうし、わかる授業・できる授業は、学力アップだけでなく充実した一日にもつながります。そこで、先生たちは授業の腕をさらに磨こうというわけです。これから12月までこの研修が続きます。たくさんの先生たちが教室を訪れ、授業を見合って授業研究をしていきますが、こういう意味があつてのことと知っておいてください。

今年の授業研修はグループ制をとっており、河東中の先生が教科を超えて3~4 人一組になり、授業を参観し研究協議をしていきます。この新たな試みも含め、賀門研究主任と仲野学力向上コーディネーターを中心とした河東中研究推進部が企画運営してくれています。

保護者の皆様には、この学校だよりを通して授業研修の様子のダイジェストを今年もお伝えしていきます。

授業研修の風景

先週からはじまった授業研修。まずは若手教師が先陣を切って授業を公開してくれました。若い先生特有の強みを発揮しベテラン教師が学ぶことも多くありました。

碓先生(国語)

本年度の授業研修のトップバッターは、7 年生担当の碓先生です。国語の授業で説明文を読み取るためには、「主張」と「根拠」に着目すべきことを授業で実証されました。



7 年 2 組で行われた授業では、桑原茂夫氏の「ちょっと立ち止まって」を題材として、説明文をどう読解するかの研究でした。7-2の生徒は、作者の主張を探すことを意識して読むことで授業のねらいが達成されていました。見つけた主張とその根拠を班の中で上手に説明できていました。

野口先生(理科)

ICT、特にタブレットを授業にどう活用するか、というのが昨年度からの本校の授業の課題です。野口先生は、コンピュータ上で粒子モデルとして考える方法を提案しました。

8 年 3 組で行われた授業。水酸化ナトリウムと塩酸をペットボトル内で化学変化を起こさせた実験結果を、コンピュータ上で粒子モデルを使って説明させるものです。ペットボトルの栓を開ける前と後の質量が変化した理由をタブレットを使って考えました。ジャムボードでの交流もあり、ICT の効果が実証された授業でした。



人は貴いものが自分の中にあることを知る必要がある

～ 吉田松陰が気づかせようとしたこと ～

吉田松陰という歴史上の人物を知っていますか？

明治維新で活躍した伊藤博文や高杉晋作を育てた先生で、幕末の人です。その松陰先生の教えて、「人は貴いものが自分の中にあることを知る必要がある」という言葉があります。

人は、誰でも貴いものが自分の中に必ず存在し、その尊いものに気づき、それを発揮していくことこそ人の道であるという意味です。松陰先生には、たくさんの弟子がいましたが、弟子以外の人にも、例えば獄中の人であってもたくさんの人を教え導きました。その教えの中で一貫しているのが、どんな人も意味があって生まれてきて、誰もが価値がある尊



い存在であるという考え方です。ただ、自分の価値になかなか気づけない。そこで、松陰先生はその人その人に備わった価値や才能を様々な方法で気づかせようとしていました。

時代は昭和のはじめに飛びますが、ある女性がいました。木村ひろ子さんという方です。木村さんは生後間もなく脳性マヒになりました。手足の中で動くのは左足が少し動くだけです。満足にもものも言えません。小学校にも中学校にも行けませんでした。わずかに動く左足に鉛筆をはさんで、母に字を習いました。彼女がよんだ短歌があります。

不就学 なげかず左足に 辞書めくり 漢字暗記す 雨の一日

この歌から、学校に行けなくてもなげくことなく、左足で辞書をめくりながら懸命に漢字を覚えようとした姿が目に見えます。

彼女は左足で墨をすって絵を描き、その絵を売ってお金を稼ぎました。自分のためにだけ生きるなら虫も同じと、絵の収入から毎月体の不自由な人のために寄付をしました。彼女はこう言います。「私のような人は、脳性マヒにかからなかったら、生きるということのただごとでない尊さを知らずにすごしたであろうに、脳性マヒにかかったおかげさまで、生きるということが、どんなにすばらしいことかを知らしていただきました。」

木村さんは、体がどうであろうと自分がこの世に生を受けて生きていること自体がありがたく尊いことだと言います。意味があって生まれてきたのだとさと、自分にできることで人に貢献したいと考えます。

木村さんは、さまざまな困難の中から自分の存在価値を見つけ、自分の秘められた能力を掘り下げ磨こうとしました。さらにその価値や能力を自分のためだけでなく、人のために役立てようとしていました。

「自分を育てるのは自分」という言葉があります。自分は自分の主人公で、世界でただ一人の自分をつくっていく責任者であるという意味です。

「人は自分をつくるために学ぶ」とも言います。生きていく上で、あらゆる困難に出会いながら自分というものをつくり上げていく。そしてその力を世の中のため、人のために役立たせる。松陰先生は、そのことに気づかせる天才だったように思います。その結果、幕末と維新の時期に活躍した人がその門下生からたくさん輩出されました。